

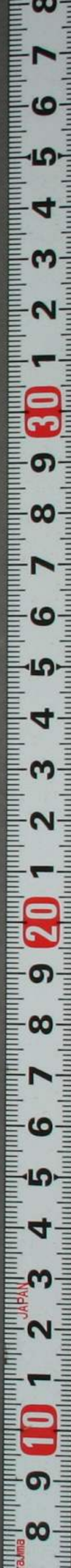


剪花翁傳前編

春三月

共五

70  
3875  
2



門 79  
號 3875  
卷 2

剪花翁傳前篇卷之二



三月 開花之部

元日立春之例



金石

○五月桃 即早桃 花重 色淡紅 開花三月三日前後之

○唐桃 花重又八重兩種にも色白なり淡紅あり又海平なり 花目狭

○けくなり 開花三月上旬挿花多分重々好々用

○阿福桃 花八重あり重々あり 色潔白 開花三月上旬形葩内小屈

○大り平らうなり頗る奇趣あり

○虎の尾櫻 花八重開花上已後之

前篇翁傳前篇卷之二 三月一

早稻田大學圖書館  
第 26.6.8 號  
藏 書

○鹽竈櫻 花重 陶花上と同

○車返櫻 花重 陶花上と同

○江戸櫻 花重 陶花上と同

○泰山寺櫻 花重 陶花上と同 御書に泰山府君櫻と見えり是と云ふ

○浅黄櫻 花八重 色淡萌黄 淡黄白は含み多し 陶花上と同

上重の山料櫻より己下の名櫻と剪花者其と本櫻と称するもの出津の

國辺にては春年内に在る陶花上己の頃之を春歳の始と存り 陶花三月十日頃之

京都にては五月許おほし大和の京都より後ふこ七八日之

○梨の花 花白 陶花三月上旬 方日向 地一分湿 土莖雜土 肥大便寒

中へ 移 秋彼岸より十月迄 接春彼岸後切接ふべし

○紫羅欄花 花赤紫 陶花三月上旬 方地 土肥 既正月の條小

見えり 下種 秋彼岸の苗代小蒔 翌年五月小分株 今年花

見ふこゆは又翌三年目の三月小至て花満 初咲之四年目も亦三月の花

あり 叔五年目大吉株とありては正月末花咲き 暖地もよくは若根

その花偶は三月咲きもわり下種 秋彼岸の後 時を春彼岸小苗

代はてそくに其年の五月小移す 水升がれた時を切口と酢煮とす

○青木 蕾淡繪葉茶色 花緋紅色 陶花三月上旬 冬月実赤

方六分陰 地半湿 土莖交肥 櫻春彼岸 葉小虎斑あり

龜甲班あり斑多しを卑一枝甚青緑一實の赤がけり落く芽  
出さるるの生育易し花実葉とも小挿花に用ふべし

○八重山吹 花の色黄葩重咲り也 開花三月上旬 方東南向

三分陰地三分濕 土莖雜肥 淡小便八月小澆ぐべし又冬月より寒中にも澆  
ぐべし花を中咲に 分株土月より寒中迄より 春を剪得ても葉萎  
凋あり是を切口で叩き抄だ酢とゆきよく煮るべし

○小手巻艸 花の色紫なり茶なり 開花三月上旬より四月 方半陰

地一分濕 土三分乾 肥淡小便 下種移春彼岸 水升くればよく  
切口を少く切逆水にて後より水器小軒置るべし

○海棠 花の色淡赤 開花三月上旬 方日高 地三分濕 土回莖 肥大

便寒中入り 移秋彼岸より寒前までより 一種とせしとらりり莖長  
く風搖して櫻の莖の如し 接ぎも春彼岸切接ふべし

○林檎 花の色淡赤 開花三月上旬 花葉ともに海棠小似たり

よく約して力あり 育方海棠小同し

○月季花 即長春 花薔薇より爽小赤し 又莖枝も約りて低し 開花

三月もさても暑寒を厭ふ 凡四季共常に咲たり 方日高 地三分濕 土樹根  
肥干鰯油粕二月上旬度 九月上旬度 櫻春彼岸 移冬月より 此木  
高と五六寸し 七盆栽小花さるものあり 俗朝鮮とせしと稱く 珍

賞と曼しやうのこれ小形こがた小作りこつくり縮ちぢらるゝの之この已下いげの薔薇ばげ育方そだてかた並ならび固かたり

○庭櫻 花千重 色太白 開花 三月中旬 方高 地三分湿 土多とくくん

肥小便春彼岸 移秋彼岸後うきあき せんげんご 花の形はなのかたちち山吹やまぶきよりち樹細きこほく長なが三さん五ご

寸偶すんぐ三尺許さんしゃくごほりもり幹枝かんしもも小屈曲こくまじてすく直す小伸このびよりこれ是これ真まの櫻さくらの種くさね類るいよりた

○蕪枋花 小英群こゑぐん房ふらとあり 色赤紫あかむら之因ゆゑ名な 開花 三月中旬 方

地土肥ちつちひえん夏なつの土用つちよう種くさねでい收とむむ株くさをわ分わててもも枯かららりり春彼岸はるせん小

下種したくさねとと比ひ此芽生このめえと翌年あしたとしの春彼岸はるせんにに分植わけうゑへへ 水升みづのぼりががたた時とき其皮そのかわ

よ剪刀はさみ紙しでで付切つぎ口くちとと二三割にさんわりくく水罌みづかめ小入置こいりババ水みづよくよく上うりり

○池の島芍薬 花常はなつね其その芍薬しやくやくの上のうへ花はな小同こどう 開花 三月中旬 育方

水升みづのぼり等らの本芍薬ほんしやくやくの條のじょう下のした小見こみええより

○金仙花 又金盞花 色赤黄あかき之常つねの如ごとくく秋あきの彼岸せん下種したくさねとと比ひ

開花 三月中旬より四月中旬しゅうちゅうちゅうまでまで方高 地一分湿 土多とくくん

肥ひ淡小便たんせうべん 下種したくさね布肥ふひをを藪やぶへへ 花はなまま小淡小便せうたんせうべん五ご六ろく度ど澆やぶぐぐべべ

五六月ごご小蔀せむしハハ冬ふゆよりより春はる小こううけけ咲さへへ又七月またしちがつ小蔀せむしとと秋あきの彼岸せん蔀せむしと

同時どうじ小咲こさき之故ゆゑ小時せうじととままのな名ななり

○一八艸 鳶尾花 花三種はなさんしゆ白しろありあり青あおなりなり青あおらら漢藤かんとう等ら 開花

三月中旬 方高 地一分湿 土多とくくん 肥ひ小便せうべん寒中かんちゆう澆やぶぐぐべべ 移うつ十月じゅうがつ之

○大藺 菫 小英こゑ簇くわくりり結むすぶ 開花 三月中旬さんしゅうちゅう之のれれ也なり二月にがつよりより菫若

前記の同書前巻之ニ

よ合せ挿さるり分株下種も春彼岸之贈まは故ふ方地  
土の意は任じ盆裁はて風眺あり此時肥油粕又田作り三筒より五六  
筒見合ふへべー大小り大あふ俗小畦釣らふ挿花らんゆらひど  
まきと用ふ是と黒蘭とつ又黒蘭は横小段に班入り地植を長丈り  
る班抜湯(盆裁は短小れを班入り之班入の長大なるもの最賞ふべー)

○燕子花

此花多種之其五種左の如く(花)とも開花三月中旬之○橋姫

花中心青く縁白隈うき○村雲花名の如く○吹墨白地青き吹  
点りり○濃紅紅梅色淡青と含りり○淡紅淡赤淡青白帯り  
○白極白りり垂白あり○藍大輪濃色りり並花あり○古肥ありりり

倍小是と六葉とへり此花小青色は(花)も変色花なり方陽面地水  
辺の湿地へ常水の帯りぬる(花)も肥淡小便春芽出前小澆へ  
下種春彼岸小まへ(花)も成長速分株春秋兩彼岸もよ分株の  
方へ念き株と地中へ(花)も残親株動痛ど(花)も榮る中

○鎌山藻蓀

花青紫形大きー開花三月中旬方日向地二分湿土

莖交肥小便春芽出前(花)も花前まで三四度澆へ分株春彼岸十日  
前小まへ燕子花より高れ所へ水氣の少き方まへへ

○二季咲躑躅

花葉も(花)も常の(花)もより(花)も杜鵑花に似て色少淡

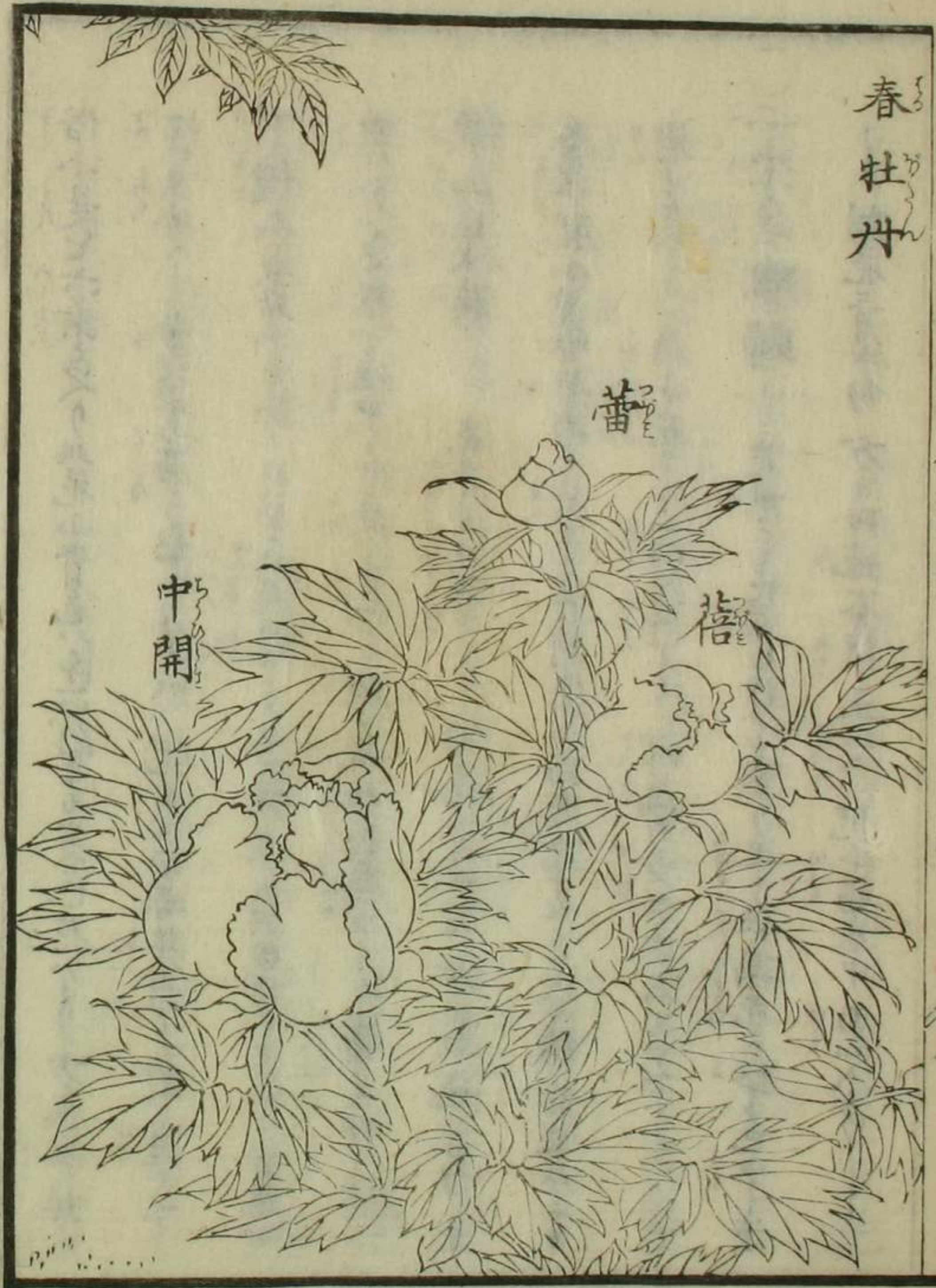
一開花三月中旬方日向地二分湿土土肥干籬寒中而已入る



河川川田村あり紫藤の房  
長きて五六尺なり

山丹花

春牡丹



蕾

花

中開

移秋彼岸 櫻春彼岸 秋の桐花の九月上旬より咲く来三月迄些々咲續く

なり水升がく時切口で叩き挫くも亦割て逆水して水器小杆置べ

○山丹花 花の色初淡赤く中頃紅色後極紅之形紫丁香の花に似たり

開花三月中旬より四月も花なり 此外年中花の開き時あり 初中後色

三段小變りたりて俗小三段花と云り 方日向四月より八月まで葎實

と覆之 地盆栽九月より三月まで地窖小入り 土回壘肥油粕 移

三月 櫻春彼岸過より又梅天の珠更は葉の形ち山梔子の嫩の如

○厚朴 信小ほうの本より花八重重色白形木蓮花に似たり 開花

三月中旬葉先出後花咲き 是山生りの故り 育方隨意

とく 丹波路り多く産す

○山覆盆子 花重色白形ち錢葉に似く葉を五加子に似たり

芒刺り 開花三月中旬 方地土を肥大便寒中入り 下種

分株春彼岸 移十月中旬

○蘿蔔花 花白又白淡赤紫は氣味もろり 開花三月中旬 三七切

置は萎凋したもの菜花と同く逆水して姑置の後立直り

○瞿麥 花數種 開花三月中旬より五月最中尚七八月小至りも残り

方地土を肥 炭小便凡下年中折見合せ渡り 下種秋彼岸

して翌年新株は常夏の株小咲り花も殊更り 剪

前記同集前集卷之二



花時八厘の刻より午の刻に限おぼしき剪て直小莖中身を水小拵置之

○**駒止** 花の色赤又赤白絞あり 開花三月中旬 膏方瞿麥小同ト

種も亦同ト 葉太く厚くして白粉を帯り 摺春株より

出芽と彼岸小缺てまきべ 又五月まきもよ

○**丁子艸** 花青色 開花三月下旬 方日向地二分湿土回莖 肥淡小

便寒中兩三度花より一兩度茂く 分株移春彼岸より

○**黄金艸** 花黄色 形索喜の莖の如く 中葩の菊小似より 莖一輪長八

九寸葉を此草苑小似より 方半陰 地二分湿土回莖 肥油粕と目

盆栽とのあり故小其心とよ 開花三月下旬 下種分株移

春彼岸より

○**吾妻菊** 花重色白 花葉葉皆もに蒲公英に似て葉厚し 開花

三月下旬より四月上旬咲花長く保つ 方日向地二分湿土摺り 肥淡小便

寒中に流す 春芽出揃ひ時油粕をねじ 花より葉の色も濃

かる種 五月小取て翌年春彼岸小まき 分株移 春彼岸より

○**九輪艸** 花重色赤白二種 開花三月下旬より四月 方二分陰地

二分湿土回莖 肥油粕淡小便折し流す 種収り 分株移 春

芽出前より 花莖長六寸節あり 花形らさく艸の如く 房の形は

莖頂の每節一段々數の莖節と遠りて咲 恰塔上并九輪小似より

○ 櫻桐花

花黄色形如魚卵の大ききもの似たり 開花十八夜頃小

咲此時黄粉散乱と 方地土肥えりむと 下種秋彼岸より 実の大き

南燭の實より少し大きき色淡玉子に青を合めり花実葉共挿花小用ふ

○ 牡丹

季六月多きと剪花者好て蕾枯と剪て以て春牡丹を挿る

花の色赤淡紅中紅濃紅黒紅赤紅紫白朱諸色班入等 花名數十

種牧養とてうづら開花三月末十八夜頃之 方日向西北の塞より一所はし

春彼岸より専ら風遠とくまへ 地花壇三分湿 土回壘 肥寒中

大便 移春彼岸又立冬前後より 接春彼岸切接ふまへ 春芽出

前油粕と入へり又十日とて経く一度又同く一度都合二十日小雨度許

へり花の時雨覆ひまへ 夏月炎天小段箕めて日覆ひまへ 花辰の

刻より開く直花乱れ花共小約やれ平く 未の刻より葩収て葉と挿

の色む翌日亦開くと昨日の比は是のころと四五日小しとて上花と下

花とて開く形ら約うれ平く 葩外裏小反く 聊も葉と挿の色

まへとて凋むとて花壇の花の明日咲きと今日開くんとて代需り西言已前

より葉莖とてめて四方と圍ひ油障子と覆ひ天日と隔て受へり乃今

朝開花をへり又今日開へき蕾と明日迄保てせん若莖而已と昨多ふ

剪て逆水とて水蒸ふ入雨風の當り冷陰の所小おと冷寒ゆり愈は

夜ふく水蒸と共小紙袋と覆ひ戸外の庭小置く雨も亦厭ふり戸外の

夜分冷氣強一断して明日まで開くまで稚枝よく水で升るものありと  
 若上り時を切て焼く逆水やう一水器ふゆる挿入やへ一又長枝を  
 好く古枝をかゆく切り水上を是の切口を割く蜀椒と五箇筒挟み切り  
 花器の水際まで前刀りて鹿皮で所々前刀痕を入爛らじ逆水一水  
 器を挿入置之此業を平生の挿花にも用之一因ふ云十兩牡丹是春牡  
 丹の一種之開花も前方も上小同一花の色初開を極紅くして中増白く  
 後ち淡紅なる毎輪ふ是のく色変まう此樹は池田北の口より  
 三町許北木の部村牡丹屋嘉十郎の庭中小在是家の珍花を前花者  
 の扱ふものふあらしめ名種なるはゆて出でり

○藤

花紫白 開花三月末より四月より咲方日向地湿土よりなり  
 肥大便寒中平日入ふ及び根を株尋常の花の春彼岸の蔓で地中に伏  
 根生して後切放ら取も一又同節小株を取今も一 名物の花は  
 多分盆栽或は棚小懸登せありて取本ふか一故小勢ひうれ株で  
 りて寄接小あまべ一因ふ小河州刈田村の左官が母屋子宅西家共  
 小庭中ちりちり房長きと五六尺ふ年々一近世の名賞とて水升  
 の方の切口を叩き挫ぎ半時を酒小挿置其後よく焼く冷水を挿置  
 後用あべ一又方花黒小上酒を湛へ切得たる其つま挿花よまべ一  
 櫻兔の花 花淡紅色 開花三月末 方地土肥

前花公司傳之刊名目卷之二

○櫻春彼岸より水升の方の挿花の切と水への程小枝を  
金植として叩尻控を大枝の鋸目と付て水器小杆へ又切と焼も可之

○高麗菊 花一重色白紫黄之又黄花あり 開花三月末より四月方日向

地二分湿土を肥淡小便下種に苗代として秋彼岸の時より

十月中小移り春株張り時先で止まらば翌年三月末より四月小咲花咲之

剪花時己の刻より未刻とかりより其外の時刻小切の花垂れ

凋て蕪回と升水の方切得て寸間焼へし水と升るなり

○四季咲燕子花 花の色青し 開花八月夜頃より四月中旬迄咲之

又夏の土用より咲出しと漸くは年中花あり 方地分株等春の花と同じ

○八重白桃 花潔白 開花八月夜頃之是桃花の殿之二種八月夜桃と呼ぶ

又逢百桃ともいふなり

○小手毬花 麻葉繡毬 鈴懸 花白形小英撰簇て徑一寸より

房はあせり 開花八月夜頃より四月小咲なり 方日向地中湿土根

をど肥淡小便分株移春秋西ひんより紫陽花樂仲々の

同種り小白房ともいふなり

○霧島躑躅 花極上紅あり中紅あり淡紅あり 開花三月末 三月方

升水等四季咲躑躅と同じ 又紅の大霧と畧し呼ぶものあり紅色

披群して葉の色青緑小白ら大きく堅くして光あり至て佳花之

又薩摩<sup>さつま</sup>の<sup>り</sup>花中淡紅なり又平戸<sup>ひらと</sup>の<sup>り</sup>白花<sup>はくわ</sup>にて葉の  
色も淡<sup>たん</sup>し中品<sup>ちゆうひん</sup>なり又雲山<sup>うんざん</sup>の<sup>り</sup>白花<sup>はくわ</sup>を淡紅の隈<sup>かみ</sup>入<sup>い</sup>る葉の  
白<sup>しろ</sup>ら白頂<sup>はくてい</sup>花<sup>はな</sup>の<sup>り</sup>岩<sup>いわ</sup>拮<sup>ぎやく</sup>挿<sup>さう</sup>ふ似<sup>に</sup>たり

○春藤<sup>はるとう</sup>瞿<sup>きよ</sup>麥<sup>ま</sup>

花淡紅<sup>たんこう</sup>藤色<sup>とうしき</sup>と合<sup>あ</sup>まり形<sup>かたち</sup>ら仙翁<sup>せんおう</sup>花<sup>はな</sup>小似<sup>せうに</sup>て大<sup>おほ</sup>き櫻<sup>さくら</sup>の花<sup>はな</sup>  
やわらりて英<sup>えい</sup>三<sup>さん</sup>十<sup>じゅう</sup>撮<sup>と</sup>まり開<sup>ひらく</sup>花<sup>はな</sup>三月<sup>さんげつ</sup>末<sup>まへ</sup>之<sup>の</sup>葉<sup>は</sup>秋<sup>あき</sup>は同種<sup>どうしゆ</sup>より小形<sup>せうがた</sup>なり  
方<sup>かた</sup>地<sup>ぢ</sup>土<sup>つち</sup>喜<sup>き</sup>亭<sup>てい</sup>小<sup>せう</sup>任<sup>にん</sup>とく<sup>とく</sup>肥<sup>ひ</sup>淡<sup>たん</sup>少<sup>せう</sup>便<sup>べん</sup>下<sup>した</sup>種<sup>しゆ</sup>秋<sup>あき</sup>彼<sup>か</sup>岸<sup>あし</sup>前<sup>まへ</sup>ニ<sup>に</sup>葉<sup>は</sup>出<sup>で</sup>る後<sup>のち</sup>本<sup>ほん</sup>  
葉<sup>は</sup>少<sup>せう</sup>出<sup>で</sup>る淡<sup>たん</sup>少<sup>せう</sup>便<sup>べん</sup>十<sup>じゅう</sup>日<sup>にち</sup>おかり隔<sup>へだて</sup>く五<sup>ご</sup>六<sup>ろく</sup>度<sup>ど</sup>洗<sup>せん</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>〜

剪花翁傳前篇卷之二 畢

